

2018.08.26 打ちあわせ記録

日時：2018年8月26日（日）14:00－17:00

場所：土浦市，奥井薬局

出席者：浅野敏久，保母武彦，荒井一美，奥井登美子，宮本一美，原田泰

(記録)

(1) 水郷水都全国会議の活動の解析

① まとめ（浅野）

まとめを作っている途中だが，2つの資料を用意した。一つは参加者数と報告数の推移の表で「図1 水郷水都全国会議の参加者数・報告者数の推移」と「表1 会議で言及されたこと」，もう一つは大会宣言，まとめ，報告に使われたキーワードの出現頻度と関係図である。参加者，報告者の推移，会議で言及されたことから3つの時期に区分できる。

第1期：1985(第1回松江)－1996(第12回徳島)

第2期：1997(第13回米子)－2006(第22回大阪)

第3期：2007(第23回松江)－2018(現在)

第1期は80～90年代で参加者，報告者とも多い。第2期は下位により変動があるが徐々に減ってきており，第3期は参加者，報告者とも少ない傾向が続いている。この3つの時期は宍道湖中海での開催が区切りとなっている。30年の動きを概括すると中海宍道湖の干拓事業が会の重要なポイントとなっているように見える。

3期を通して全体に開発と公共事業の話が多く，次いで市民参加と住民運動が多い。

最近減ってきたのは，水質，公害の問題，上水・下水，雨水利用である。

増えてきたのは生物多様性であり，治山治水，災害，放射能，最近は米軍基地である。

一つの傾向として地域の歴史，文化および農林水産の話題が減ってきている。

全体として昔はテーマに幅があり変化に富んでいたが，最近では論点が絞られてきており，それにとまって参加者が減ってきているのではないか。

文言の関係の解析から見ると，「水」，「全国」，「環境」といったキーワードが頻繁に用いられている。また「公共事業」，「ダム」，「長良川」が一つのかたまりにあり，公共事業の問題に関連して「霞ヶ浦」，「宍道湖」少し別に「諫早」が語られている。そのほか「地下水汚染」，「持続可能な社会」。「生物多様性」，「親水権」といった文言が離れたカテゴリーとなっている。

②コメント

・1985年の開催の発端は中海の本庄工区の干拓事業であり，1997年に延期となり2007年にこの問題は収束した。この間に公共事業の話が語られた。第2期は長良川や諫早が目された時期で，阪神淡路大震災(1995)のあとボランティア，市民参加が時代のキーワードとなった。最初は行政と市民運動とのケンカであったが，第2期は協働がでてきた。しかしケンカは終わっていない。第3期は中海の干拓事業問題が終わって地域再生などの話が出てきた。

・最近では天候の異変により災害問題が大きくなっている。安全な環境という中で災害が水の運動でも重要なキーワードになってきている。

・原発の問題もこれから重要になるだろう。

・発表としては水郷水都大会の一覧表，開発，環境，社会の流れの年表があるといい。

・各回のテーマが絞られるのは，現地実行委員会の関心もあるのではないか。

- ・いろいろな話題をたくさん盛り込めば参加者が増えると単純化できないのではないか。80年代は一つの会でいろいろな課題を扱っていたが、その後課題ごとに運動が分化しているのではないか、
- ・第2期の終わり頃から水郷水都の役割は終わったという意見も出てきている。
- ・各地での大会に参加することによって知らなかった問題や文化に触れる機会になっている面もある。
- ・思想的なテーマが減ってきている。
- ・現地実行委員会は活発だが全国実行委員会での議論が減ってきているのではないか。
- ・河川法の改正により河川行政に環境や住民参加が入ったが、現場では混乱もあった。
- ・第1期の頃は都市河川の再生の話がいくつかあったが、その後うまく進展しなかったのではないか。
- ・大会に全国から実行委員が集まるので、短くてよいから各地の報告をしてもらおうとよい。
- ・諫早の判決のその後、沖縄、大野のその後、新潟の話を聞きたい。
- ・今回も声をかけて各地からの報告をもらったかどうか。霞ヶ浦、諫早、北九州、徳島（吉野川、川の学校）、新潟、広島。
- ・東北はいないのか。

(2) 30年の成果の整理（保母）

①保母集約

浅野のまとめから課題が導き出されるように3点に集約してみる。

1. 30年間の活動を通して、地域の問題を解決し、住民の目を向けさせることができた。全国会議が30年間活動した意義である。
2. 川の問題は地域の自治の問題である。解決するのは地域住民の責任だという考え方を確立した。
3. 2015年国連総会でSDGs（持続可能な開発目標）が設定された。水郷水都の活動もSDGsの視点で見直すことができるのではないか。

②コメント

- ・今回の第17回世界湖沼会議のテーマは「持続可能な生態系サービスを目指して」であり、SDGsにつながるテーマである。
- ・北海道の下川町が総合計画に導入している。
- ・この議論をSDGsにまとめるときれいごとになるおそれがある。
- ・今回結論をまとめるよりも、課題を整理して次の行動の方向性を示唆するのがいいのではないか。

(3) 地域からの問題提起

①問題提起（荒井）

全国会議といいながら全国的な運動になっていない。会議の時にだけ議論するのではなく、全国と地域を連携する役割を果たしてほしい。開催した地域がその後どうなっているのか継続した報告を記録して資料として出すことが必要だ。

②コメント

- ・地域間の連携をコーディネートする事務局体制を整備する必要がある。2008年東京大会で会員制を導入し、汽水湖研究所が事務局を担当することになったが、10年以内に会員数500名以上にすることが引き受ける条件だった。2018年現在約50名で実現していない。財政的にも破綻している。この問題が全国実行委員会できちんと議論されてこなかった。
- ・会員のメリットは全国の地域の情報が入手でき、運動の連携ができることだろう。
- ・情報だけならばインターネットで十分入手できる。

- ・大会で報告できることが重要だ。
- ・大学生が参加しやすい時期（夏休み）に開催してはどうか。

(4) 世界湖沼会議のワークショップ企画について

①企画説明（原田）

- ・10月16日（火）18:00-20:00, つくば国際会議場小会議室 404

第17回世界湖沼会議の参加者しか参加できない。また湖沼会議の参加者はだれでも参加できる。

- ・プログラムは「国内の報告」「国外の報告」「その他の報告」「議論」を想定している。「国内の報告」は水郷水都全国会議から、活動報告を行う。内容は第34回大会の議論の概要紹介になるだろう。「国外の報告」は世界湖沼会議の招待講演者（タイチェンマイ大のシチョン教授）を考えているがまだ交渉はしていない。その他は未定である。時間が2時間で通訳を入れると実質1時間であり、報告と若干の質疑程度となるだろう。
- ・課題は通訳をどうするか、国外報告者との交渉、資料の準備である。

②コメント

- ・通訳は各自、つてを探る。
- ・水郷水都からの報告のポイント
 1. 水郷水都の活動は1984年の国際湖沼環境会議から始まったことを強調する。
 2. 全国組織として30年間活動し、成果を上げている。
 3. 地域の住民が主体であり、住民が自ら変えていく力を付けることを重視している。

(5) 30年史の発行

①企画案（保母）

30年史を作ろうという話があったが内容を拡充して出版社から書籍として出せないか。住民運動だけでなく公共事業と環境の問題、子どもの教育など多様な話題について執筆者を拡充したらどうか。

②コメント

- ・まず今度の大会のまとめを作りこれをもとにしたらいいのではないか。
- ・Amazonの自費出版の方法もある。

(6) 当面のスケジュール

・9月9日（日）の第3回実行委員会に大会企画の概要を出したい。浅野、保母、荒井の3報告のメモがほしい。3報告に関しては本原稿の枚数は自由、締切は9月20日（木）とする。このあと編集作業を行い9月30日（日）に大会資料集の確定稿（pdf）を印刷屋（プリントパック）に渡したい。印刷屋からの資料集の配送は10月10日（水）とする。

（以上）